子育てさなかの開業、臨床研究も

あとに続く若き女性医師たちに大いなる期待

神戸市灘区
谷眼科医院
院長 谷（たに） 恵美子（えみこ）

昭和58年に神戸大学医学部を卒業し、同大学医学部眼科学教室に入局。兵庫県立こども病院、社会福祉法人恩賜財団済生会兵庫県病院、国家公務員共済組合連合会六甲病院での勤務を経て、平成7年に神戸市灘区で開業。平成17年に同区森後町に移転、現在に至る。

毎日の診療の中で感じていることを女性医師の視点で執筆してください、と原稿を依頼されました。ここ10年で女性医師の人数は劇的に増え、また、社会からの女性の活躍への期待は飛躍的に高まりつつあることを感じます。若い女性医師の方々へのエールの気持ちを込めて書かせていただこうと思います。

私は母校での研修後、兵庫県立こども病院で勤務していた時期に出産と育児を経験しました。当時の医師には育児休暇という概念がなかったため、実家の近くへ引っ越しをし、両親の援助にすがって職場復帰しました。人生で最も大変な時期と思っていましたが、当時の両親の年齢に達した今、両親もさぞ大変だっただろうと、今さらながら感謝の気持ちが湧いてきます。

その頃、兵庫県立こども病院眼科の初代部長を務められた山本節先生が神戸大学教授に就任され、小児眼科のみならず、さまざまな分野の研究の発展に取り組まれました。そして、後に助教授になられた片上千加子先生が米国、シンシナティ大学での研究生活を終えて帰国され、角膜分野の研究を指導し、次々に女性医師が研究室での活動を始めました。

私はというと、済生会兵庫県病院、六甲病院での勤務と家庭での育児に明け暮れ、子どもが小学4年生と2年生になった年に灘区にて開業することに。テナントの内装を開始するちょうどその日に、阪神・淡路大震災に見舞われました。震度7の激震地区でテナントビルも自宅も半壊。2か月遅れで何とか予定の地で谷眼科医院が船出しました。

2年経ち、仕事も子育てもどうにか落ち着きを取り戻した頃、勇気を出して山本教授にお願いし、片上先生のご指導で角膜創傷治癒の研究を始めさせていただくことになりました。平成10年の福岡での日眼総会で「学術展示優秀賞」を頂いたのは嬉しい思い出です。平成12年に根木昭先生が教授に着任され、この研究を英語論文にできれば学位論文にしましょうと励ましていただき、平成14年に学位を頂くことができました。

その後は診療の傍ら、依頼される諸処の仕事を引き受けてきましたが、2年前より、日本眼科医会の「男女共同参画推進委員会」に近畿ブロックより参加しています。冒頭に書かせていただいた女性医師の環境の変化は、先輩たちのこのような地道な活動が実り始めたおかげでもあることを知りました。

OCTや再生医療をはじめ、次々に新しい展開を迎える眼科診療の世界、進化はまだまだ続きます。恩師や先輩たち、支えてくれた家族に感謝しつつ、後輩女性医師たちの活躍にエールを送り、筆をおかせていただきます。